

## ジャック・ロゲIOC会長への名誉博士称号授与

真田 久

筑波大学人間総合科学研究科准教授

嵯峨 寿

筑波大学人間総合科学研究科准教授

### 1. ロゲ会長への名誉博士称号授与の趣旨

平成18年10月20日、筑波大学はジャック・ロゲ国際オリンピック委員会 (IOC) 会長に筑波大学名誉博士称号の学位記を授与した。

ジャック・ロゲ (Count Jacques Rogge) 氏は、1942年にベルギー・ゲント市で生まれ育ち、ゲント大学でスポーツ医学の医学博士を取得された。整形外科医でありながらロゲ氏はスポーツマンでもあり、1968年のメキシコ大会、1972年のミュンヘン大会、そして1976年のモントリオール大会にヨットの選手として出場している。本学の加藤澤男教授 (体操で金メダル) と同じ3大会に出場していたことになる。また、オリンピック種目ではないが、ラグビーでもナショナル代表として活躍された。スポーツ科学や医学を修めながら、スポーツマンとしてもすばらしい活躍をされていた。

さらに、それだけではなく、スポーツを

通して青少年の心身を発達させながら世界の平和に寄与するというオリンピック・ムーブメントの活動にも精力的に力を注がれた。その代表的な役割は次のものである。

ベルギー・オリンピック委員会会長

1989～1992年

ヨーロッパ・オリンピック委員会会長

1989～2002年

国際オリンピック委員会理事

1999～2001年

IOC理事の時には、専門的な知識を生かしてドーピング問題の撲滅に力を注いでいる。そして、2001年7月に第8代国際オリンピック委員会会長に就任した。その後はオリンピック・ムーブメントを推進するIOC会長として、オリンピック競技会の改革に着手し、人類にとってより適切な規模のオリンピック競技会の開催と、ドーピング問題の撲滅に積極的に取り組みながら、平和の祭典としてのオリンピック理念の普及に

尽くされてきた。IOC委員の定員を115人に減少させ(就任時は130人ほど)、オリンピック種目の見直しを行う(その結果、野球とソフトボールが除外されることになる)など、肥大化の一途を辿っていたオリンピック競技大会の適正化を着実に成し遂げてきた功績は大きい。

## 2. ロゲ会長と筑波大学

筑波大学に対してロゲ会長は、筑波大学で行われた五輪講座「オリンピックの望郷」(平成15年度総合科目)の授業において、学生たちにメッセージを寄せて下さり、その後も同五輪講座を継続的に支援して下さいました。

ジャック・ロゲ会長は、オリンピック・ムーブメントの改革と発展に積極的であること、筑波大学の学生に対して、オリンピックへの幅広い学問的関心の向上に貢献されたこと、および筑波大学の研究者にオリンピック研究の重要性とその意義を提供されたこと、などに際し、筑波大学名誉博士の学位を授与することが決定されたのであった。

筑波大学の前身、東京高等師範学校の校長であった嘉納治五郎が、1909年にアジアで最初のIOC委員に就任したことにより、日本のオリンピック・ムーブメントは歩みを開始した。2年後の2009年に100周年を迎

えることになる。東京高等師範学校や東京教育大学、そして筑波大学からは多くのオリンピック選手や役員を輩出し、そして近年始められた大学での五輪講座など、日本のオリンピック・ムーブメントの発展に貢献してきた。このような折にIOC会長を招いて、名誉博士称号を授与したことは、今後もオリンピック・ムーブメント振興のための研究と教育において、筑波大学がさらに発展していくことを世に公表したとも言え、その責務は大きいであろう。

## 3. ロゲ会長の記念講演から

筑波大学名誉博士号を受賞された記念講演で、ロゲ会長自身も、嘉納治五郎について触れて下さった。近代オリンピックの創設者、ピエール・ド・クーベルタンによって始められたオリンピック・ムーブメントを発展させるために、東洋においては柔道を創設した教育家、嘉納治五郎が初のIOC委員に就任して、オリンピック理念をクーベルタンとともに広めた。その後日本においてオリンピック・ムーブメントが順調に発展し、スポーツが青少年教育の中に位置づけられ、夏季大会と冬季大会を合わせて3回もオリンピックが開催された、と称えて下さった。

その一方で、ロゲ会長は今日のスポーツ面での課題も指摘された。それはテレビ

ゲームやインターネットなど、スクリーン文化による若者のスポーツ離れの現象で、特に先進国では深刻であること、また、ドーピングについては、決して気を緩めてはならないことも指摘された。

さらに、スポーツの価値として、コミュニティの形成ということを指摘された。スポーツは若者に、コミュニティ形成の大切さを教える、という主張であった。これは世代間の対話の欠如や、携帯電話に夢になっている若者に顕著なネット依存症候群などによる、コミュニティ不全が叫ばれる日本の社会現象に照らして、重要な指摘であろう。

ロゲ会長が、今回の来日中、筑波大学以外の場所でも、しばしば嘉納治五郎に触れて下さったことは、筑波大学関係者にとり、喜ばしいことであった。嘉納が筑波大学の前身である東京高等師範学校の校長を23年間も務めたことを伝えると、たいへんに感激されていた。また、第3代IOC会長、バイエ・ラツールは同じベルギー出身で、嘉納とたいへん親しく、1940年のオリンピック大会の東京招致に、オリンピック・ムーブメントの世界的な広がりという点から奔走したのであった。私ども体育科学系で組織したIOC会長名誉博士称号授賞実行委員会(萩原武久、野村良和両委員長)は、その歴史的事実もロゲ会長に伝えることができ

た。

さて、2016年の第31回オリンピック競技大会の開催地に東京都が立候補することを表明し、既にNPO法人東京オリンピック招致委員会が設置された。その事務総長には本学の人間総合科学研究科の河野一郎教授が就任され、すでに計画の策定などの準備が始められている。

2016年の大会の開催地が決定するのは、2009年の10月である。この年は嘉納治五郎がIOC委員に就任してからちょうど100周年にあたる。つまり日本がオリンピック・ムーブメントに参加してから100年目であり、日本がオリンピックとともにどのように平和と教育のための道を歩んできたのか、そしてこれからスポーツを通して、何を世界に発信し貢献できるのかについて、明確な指針を打ち出す時である。その際に、嘉納治五郎の考えた教育思想やオリンピックの理念に触れてみるのが、100周年の意義を考えると必要であろう。嘉納の教育や柔道思想の中に、若者のスポーツ離れやコミュニティ形成のヒントを見いだすことは難しいことではないだろう。その歴史的な遺産(レガシー)と、近未来的なオリンピック・ムーブメントに果たすべく役割をあわせ持たせたビジョンを形成し、それが世界のIOC委員に支持されて、東京での開催が決まれば、なお素晴らしいのではないら

うか。そうした未来に向けて我々は英知を  
結集すべきであろう。

(さなだ ひさし/スポーツ人類学)  
(さが ひとし/レジャー論)



名誉博士称号授与



記念レセプション